

Newsletter

2003.Jan. No.1

学問領域の広がりと「教養研究」

常任理事 黒田 昌裕



先日、「アジア地域の環境保全」と題するシンポジウムに出席する機会がありました。これは数年前、当時の文部省が始めた未来開拓推進事業の複合領域の課題の一つです。未来の科学領域の開拓を目指すというのがこの事業の目的ですが、21世紀の科学の特徴として、科学の領域を跨る学際的連携が必要とされる課題に敢えて取り組もうとするのが、この複合領域なのです。課題の性格から、エネルギー、建築、生物学、医学などの理工・医学系の専門家から、経済学、社会学、文化人類学などの人文・社会科学の専門家に至るまで、異分野専門家間の議論が展開されました。いわゆる「文理融合」の実現の場であり、それが21世紀の学問の一つの形と考えられてきたのです。5年間の議論は、異なる言語をもつ学問分野とアジアという多様な異文化領域のコミュニケーションを図るということから始まりましたが、それが予想以上に難しいことが判りました。人類の学問の進歩は、ルネッサンス以来、20世紀に至る

まで、専門化、細分化の歴史です。それをいきなり総合して、共通の土俵で議論するには、もともと共有する部分が不可欠なのです。5年間の議論を通じて、それを可能ならしめるのが、言葉の真の意味での「教養」という共通部分ではなかろうかと考えるに至りました。「教養」を研究する拠点として発足したこのセンターの役割は、未来の学問を開拓するための異なる専門領域間コミュニケーションの共通言語の場を培うという重要な役割を担っています。それぞれ発想と方法論を異にする学問が、総合して21世紀未来の学問を開拓していくという人類の新事業への挑戦は、いわゆる言語の表象を超えた超表象の「教養」の文化を創造する文明の開拓にあると確信しております。

CONTENTS

学問領域の広がりと「教養研究」	黒田昌裕	1
ニューズレターの発行にあたって	羽田 功	2
コーディネート・オフィス		2
「教養研究」を支える	宮木さえみ	3
研究プログラム 特定研究		4
研究プログラム 一般研究		6
活動報告・事務局だより		8



教養研究センターのニュースレター第1号をお届けします。

昨年7月の開所以来、教養研究センターは9月30日に開催した開所記念シンポジウムをはじめ、極東証券寄附公開講座、慶應義塾大学港北区民講座、来往舎イベントテラスでの教養研究センター企画あるいは共催形式の各種行事・イベントなどを実施してきました。また、センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの推進やセンター管轄のプロジェクト室を利用した一般共同研究へのサポートなど、教養と教養教育に関わる研究活動の積極的な展開をはかる活動に鋭意従事してきました。

さらに、研究企画ボードを中心とするコーディネート・オフィスでは、センターの恒常的な研究活動や来往舎における種々の研究活動を支える基盤作りを進めつつあります。その一環として、センター基盤研究に活かすべく、2003年の1月には日吉専任教員を主な対象として「教養教育」に関するアンケート調査を実施しました。また、九州大学、北海道大学、京都大学、広島大学、立命館大学、同志社大学、大学コンソーシアム京都など、他大学や関係機関でのインタビューも進行中です。また、2月5日には教養教育に外国語をどのように活かせばよいかをテーマに2回目のセンター主催シンポジウムも予定されています。

しかし、こうした活動も、ただこれを実施するだけでは教養研究センターの活動として十分に認知されるわけではありません。重要なのは、何よりもまずセンターの活動を広く皆さんに知っていただき、センターへのご理解をいっそう深めていただくことであると考えます。その上で、皆さんからのご批評やご教示をいただくことができれば、教養研究センターの活動はいっそう充実し、発展していくものと思います。

教養研究センターの広報活動は、コーディネート・オフィスの広報・発信セクションが主体となって展開されています。すでに開所記念シンポジウムを採録した小冊子の発行など、このセクションからは具体的な成果が生まれつつあります。あるいは、今後展開が想定されているさまざまなプログラムについても、それぞれに相応しい広報・発信の方法を検討中です。そして、ここに発行のはじまった「ニュースレター」によって、センターに関わるより網羅的な情報を定期的にお届けすることができるようになります。

年2回の発行を目的に、皆さんにご愛読いただけるようなきめの細かい紙面作りを目指していきたいと考えておりますので、ご理解とご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

コーディネート・オフィスは教養研究センターの中核として、センターにおけるさまざまな活動を企画・実行・支援していく組織です。コーディネート・オフィスは研究企画ボードを中心として、研究推進セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクションから成り立っており、それぞれの役割と構成メンバーは次のとおりです。

研究企画ボード

教養研究センターの年次計画の策定および予算の立案、センター主導型研究の企画・運営、各セクションの活動の統括などを行います。

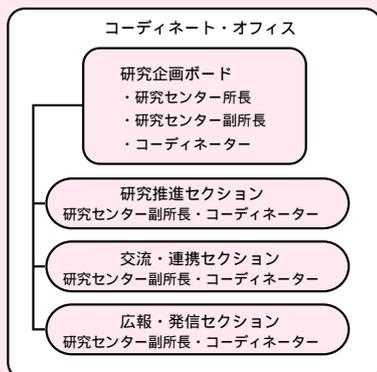
羽田 功（所長、経済学部）
宮木さえみ（事務長）
浅川順子（副所長、商学部）
小瀧昭夫（副所長、経済学部）
木俣 章（副所長、法学部）
太田昭子（法学部）
熊倉敬聡（理工学部）
近藤明彦（体育研究所）
佐藤 望（商学部）
鈴木伸一（医学部）
高橋幸久（運営サービス）
千田大介（経済学部）
宮坂敦子（教養研究センター）

交流・連携セクション

塾内外との交流・連携に基づく種々の企画を立案・運営するに必要な作業全般を行います。

小瀧昭夫（副所長、経済学部）
石井 明（経済学部）
石井達朗（理工学部）
M. ガボリオ（経済学部）
小菅隼人（理工学部）
近藤幸夫（理工学部）
田上竜也（商学部）
滝本佳容子（商学部）
納富信留（文学部）
橋本順一（商学部）
松原彰子（経済学部）

コーディネート・オフィス



研究推進セクション

センターにおける研究活動が活発かつスムーズに展開されるための環境整備を担当します。特に日吉キャンパスを中心とした研究者データベースの構築や各種研究情報の収集・管理、センターのホームページのデザイン、研究機器・機材情報の整理・提供を行います。

- 浅川順子（副所長、商学部）
- 市古みどり（メディアセンター）
- 金谷信宏（法学部）
- 木島伸彦（商学部）
- 小林宏充（法学部）
- 七字眞明（経済学部）
- 志村 正（法学部）
- 高橋宣也（文学部）
- 西川正二（商学部）

広報・発信セクション

センターの活動を定期的に伝えるためのニュースレターや活動報告書の編集・発行を行うと共に、活動の成果などを、さまざまな媒体を有効に使って発信します。研究成果の刊行も計画しています。

- 木俣 章（副所長、法学部）
- 岩波敦子（理工学部）
- H.J.クナウプ（経済学部）
- 坂田幸子（文学部）
- 篠原俊吾（法学部）
- 多田重文（学生総合センター）
- 野口和行（体育研究所）
- 松岡和美（経済学部）
- 安田 淳（法学部）
- J.M.レイサイド（法学部）

2002年7月1日、慶應義塾大学教養研究センターの発足と同時に、日吉研究支援センターとの兼務発令がされ、事務長に就任しました。私のほかに、やはり、日吉研究支援センターとの兼務発令がされた事務員1名で、この教養研究センターの事務を担当することになりました。



最初の大きな仕事は、開所記念シンポジウムの開催でした。羽田所長をはじめ、副所長やコーディネーターの先生方と相談をしながら、会場の確保、案内状の発送、パネリストへの依頼状発送、当日のプログラムの作成、受付などの要員の確保など、夏季休業期間に準備を進め、9月30日に、無事、開催にこぎつけました。「教養教育をめぐって」というテーマで行われたこのシンポジウムは、非常に盛会で、170名を超える参加があり、懇親会の席においてまでも、熱い議論が戦わされていました。このシンポジウムの内容は、48ページの冊子にまとめられています。

この研究センターは、日吉キャンパスに限らず、慶應義塾全体の教養教育を研究する場として、発足しました。中央教育審議会が、昨年、「教養教育の再構築の必要性」を答申するなど、日本の高等教育界全体が、「教養教育の重要性」に目を向けています。新聞紙上やテレビなどでも、「新しい教養教育の試み」が話題になっています。しかし、「教養教育を研究するセンター」は、まだ、ほかの大学にもあまり例がありません。したがって、研究を支える事務も、試行錯誤の連続です。

幸い、このセンターは、事務を担当する職員も、コーディネーターとして、運営に深く関わるような組織構造になっています。職員も、今後の大学教育の進む方向や、他大学の先進的な教養教育への取り組みなどを広く勉強することによって、先生方がより深い研究を進められるように努めたいと考えています。

教養研究センターの活動は、非常に幅広く、日吉キャンパスの新研究室棟である来往舎を拠点として、研究活動が行われています。したがって、教養研究センター事務員だけでなく、日吉研究支援センター職員全員、さらには、日吉キャンパスの職員が一体となってこのセンターの事務を支えています。この教養研究センターから発信された研究成果が、慶應義塾内にとどまらず、広く社会全体に影響を及ぼすようになることを願って、裏方として、努力を続けたいと考えています。

義塾内外からの幅広いご協力とご支援を賜りますようお願いいたします。

1 リベラルアーツ教育の 総合モデル構築(企画研究)

本プロジェクトは、先行する教養教育研究会(代表・羽田功経済学部教授)の研究成果(『教養教育のグランド・デザイン』2002年刊を参照)を踏まえて、新しいタイプの教養教育の実現化の方策を見出すことを目的としています。

具体的には、以下の2点について検討と作業を続けています。

ものごとを見るにはさまざまなアプローチがあり、それがいわゆる個別の学問領域に入っている、あるいは、既存の学問分野だけでは扱えない学際的なアプローチであったりする。どのようなアプローチがあり、それを追求するにはどうすればよいかという基礎を学ぶ必要がある。そのための「知の総合講座」とでも呼ぶべき科目を立てるにはどうすればよいかを検討する。

そこで獲得した知的関心を伸ばしていくためには、「読み解き、書き、発表する」という大学生の「教養」の基礎能力を発展させなければならない。そのための「スタディ・スキルズ」という小規模なセミナー形式の科目が必要である。その科目で使える基礎的なスキルについてのテキストを開発する。

2003年夏休み前までに一応の作業を終え、夏休みを含め秋学期に実験的な形で模擬授業を実施できるように準備をする予定です。

【メンバー】湯川 武(商) / 近藤明彦(体研) / 佐藤 望(商) / 下村裕(法) / 新田孝彦(北海道大学大学院) / 羽田 功(経) / 増田直衛(文)



研究代表 湯川 武

3 フレーム意味論・構文的アプローチによる オンライン日本語語彙情報資源の 構築(言語知重点研究)

日本語話者が持っている日本語語彙についての知識は一体どのようなものでしょうか？ 私たちのプロジェクトでは、いわゆる辞書の定義のみならず一般常識やさらに百科事典的知識をも含んだもの、と考えています。特に、話者がある語の意味を理解するにはその語の認知的な背景基盤(フレーム)を考慮する必要がある、というのが私たちの仮説です。そして、そのような日本語語彙に関するネイティブスピーカーの知識を語彙項目ごとに定義し豊富な例文をつけ語彙情報資源として整理していこう、というのがプロジェクトの究極の目標になります。まだパイロットスタディを始めたばかりですが、最終的には辞書とシソーラスの機能を兼ね備えた、日本語学習者や自然言語処理システムに役立つオンライン語彙情報資源の構築を目指しています。その際用例は主に新聞記事コーパスから抽出する予定です。

このプロジェクトを私たちは略して「日本語フレームネット」と呼んでいます。現在アメリカで構築されつつある英語に関するオンライン語彙情報資源「フレームネット」と連動しているからです。しかし、単に「フレームネット」の日本語版の構築を目指すのではなく、従来の国語辞典の記述や語法分析等あまり注目されていなかった語や用法でなおかつコーパスにおける出現頻度の高いものから順次分析、記述していく予定です。

【メンバー】小原京子(理工) / 石崎 俊(環境情報) / 大堀壽夫(東京大学大学院) / 斎藤博昭(理工) / 鈴木亮子(経) / 藤井聖子(東京大学大学院)



研究代表 小原京子

2 外国語の自律・持続型学習プログラム 開発(言語知重点研究)

多様化する情報端末を活用する自律的かつ持続的な外国語習得、e-learningの可能性を研究することを目的とします。オンライン教材の作成や、オンライン学習の実行システムを使った授業の実施など実践面を重視します。すでに教材の基礎となるデータベースの作成(ドイツ語・フランス語)と学習の実践(ドイツ語)は始まっていますが、その学習上の有効性を、学生へのアンケートや聞き取りで調査するとともに、理論研究も並行して行っています。また、ネットワークを用いた遠隔授業の実験にも着手しました。「基盤研究 外国語教育研究」やその他の外国語関連の共同研究と連携し、一層の活性化をはかりたいと思っています。

【メンバー】朝吹亮二(法) / 岩波敦子(理工) / 大谷弘道(理工) / 片木智年(文) / 金田一真澄(理工) / 久我俊二(法) / 斎藤太郎(文) / 志村明彦(経) / 千田大介(経) / 森 泉(理工)



研究代表 朝吹亮二

4 インター・キャンパスの創出による 多文化共生の可能性(身体知重点研究)

本プロジェクトは、現在の日本における大学の知の自閉の状況を打開するために、大学内の教育・研究と大学外での実践・体験をダイナミックに相互作用させる「インターキャンパス」の創出を目指します。同時に、そのインターキャンパスの活動を通じて、多文化共生のための様々なプログラムを開発・展開していきます。2002年度は、その実験的試みとして、文学部に開講されている「美学特殊C」において、学生主導型の様々なプログラム(「京島編集室」「萬来喫茶イサム」など)を展開しました。詳しくは、<http://here.at/darts/>をご覧ください。

【メンバー】熊倉敬聡(理工) / 石橋源士(ライフ・コンセプター) / 芹沢高志(P3 art and environmentディレクター) / 松丸亜希子(P3 art and environment) / 水田拓郎(サウンド・スペース・オーガナイザー)



研究代表 熊倉敬聡

5 | 21世紀のアメリカをめぐる文化のダイナミズム (文化知重点研究)



研究代表 近藤光雄

現代合衆国は国内的に保守主義とリベラルの膠着状態にあり、移民の質量的変化で、社会の分裂の危機に面しています。対外的にはソ連、共産圏の崩壊、ヨーロッパ統合により、合衆国が従来のように、他者を見ることにより自己のアイデンティティを確立することができなくなりました。テロリストは脅威ではありますが、規模がヨーロッパやソ連ほどではありません。

21世紀の合衆国では既存の価値観、歴史観の修正を求め、文化戦争の現象が強くなるでしょう。

私たちの研究会では歴史観の再検討、集団的記憶の再構築、歴史教育、博物館展示、映画、舞台などの文化表現媒体に見られる文化社会現象の変化を取り上げていきます。研究成果を発表し、全塾でのアメリカ研究教育に応用、異文化教育、総合的な文化研究、外国研究のうけぎらのモデルを提示したいと考えています。

【メンバー】近藤光雄(経) / エインジ, マイケル(経) / 奥田暁代(法) / 鈴木透(法) / 常山菜穂子(法)

21世紀に入り、「民族」あるいは「民族問題」が重要なキーワードとして喧伝されています。しかし、「民族」という概念には大きく歴史性や地域性、イデオロギー性が影響を及ぼしています。たとえば「民族問題(紛争)」においては、それがあつた時代や地域、イデオロギーが必要とする「民族」イメージを生み出し、さまざまな口実として利用されていると言えるでしょう。しかも、その際重要な役割を果たしているのが、文字情報から最新技術にいたる広義のメディアです。民族のイメージはメディアなくしては成立しません。そこでこのプロジェクトでは、時代・地域の射程とメディアの意味をできるだけ広く取り、民族イメージの形成をメディアを軸として究明することを目的としています。



研究代表 羽田 功

【メンバー】羽田 功(経) / 石井康史(経) / 臼杵 陽(国立民族学博物館地域研究交流センター) / 工藤多香子(経) / 佐原徹哉(明治大学) / 佐谷眞木人(恵泉女学園大学) / 鈴木 透(法) / 種村和史(商) / Vogl, Joseph (Weimar大学) / Matala de Mazza, Ethel (Berlin大学研究センター)

7 | 民族イメージの言語性と身体性 (融合研究)

8 | 空間と人間：キャンパス・スフェアにおける適応・生態・表象・デザインの分析と展開 (融合研究)

この研究は、慶應義塾の日吉キャンパスを活動の場としている教員(大学・高等学校などすべての教育機関)の人材および知性を有効かつ多角的に利用し、プロジェクトに参加した教員・研究者が各々の分野で用いてきた「空間」および「人間」という言葉・概念をそれぞれの立場から多層的・多角的に分析して、最終的には研究を分担している教員・研究者全員が納得できるような統合的な見方を探ることを目的としています。3年をめぐり研究を進め、1年目は基礎・基盤研究、2年目は日吉キャンパスとの比較・応用研究、3年目はまとめ・統括を行う予定です。今年度の具体的な各研究は、小瀧昭夫らによる「都市空間と現代人」、岸由二らによる「自然環境と保護する人々」、坂上貴之らによる「特定空間内での個体・集団の行動」、大西章らによる「戦跡遺跡の伝承と保全・利用」、高山・櫻井らによる「先史遺跡と先史時代人の古生態」が進行しています。

研究代表：高山 博

【メンバー】高山 博(文) / 大西 章(高等学校) / 小瀧昭夫(経) / 岸 由二(経) / 坂上貴之(文) / 桜井準也(文)

6 | 文化としてのウォーキング (融合研究)

「ウォーキング：歩行」を表す言葉は闊歩・散歩・逍遙...等々数多くありますが、言葉の違いによってその様子も微妙に違うようです。近年有酸素運動としてのウォーキングが健康に良いということから流行っていますが、本プロジェクトは、ウォーキングを単なる健康志向のためのエクササイズに留めず、その背景にある歴史的・文化的背景をも含めて多角的・総合的な視点から解明していきます。そしてウォーキングを人間の身体的・精神的営みの一形態としてとらえて考察し、これらの成果を加えた新たなウォーキングプログラムを開発し、授業や公開講座等を設置するという発信型の研究を展開しています。現在、ヨーロッパ(イギリス、ドイツ)のウォーキング文化の歴史的検討、GIS(地理情報システム)の活用、ストック・ウォーキングの効果に関する生理学的検討などの様々な研究が展開されています。



研究代表 近藤明彦

【メンバー】近藤明彦(体研) / 市村操一(東京成徳大学) / 太田 弘(普通部) / 勝川史憲(スガ研) / 加藤厚子(日本大学大学院) / 川口征夫(UK Project) / 妹尾堅一郎(政メ) / 野口和行(体研) / 横山千晶(法) / Joachim, Ruehl (Deutsch Sporthochschule Koeln)

心身が健康な人にとって特別な理由がない限り「障害」ということを意識することは少ないと思います。しかし、心身が健康であるのは誰にとっても一時的なことなのです。私たちは病気や事故等の偶発的な要因だけでなく、老化というすべての人に確実に襲いかかってくる事実によって「障害」をもつことがあります。この意味で「障害」は身近な問題であり、「障害」をもっている人にも住みやすい社会を創っていくことは、すべての人にとって大切な課題だと言えます。ところが、現状の社会では、「障害」があると多くのバリア(障壁)に遭遇し

ます。本プロジェクトでは、物理的・文化的・制度的・心理的な観点からバリアの存在しない21世紀型バリアフリー空間のモデル構築を目指します。障害のある学生への具体的な支援活動、学内のバリアフリーチェック、バリアフリー教育のあり方の検討、研究成果公開のアクセシビリティの向上等の多角的な研究・教育活動を展開しています。

【メンバー】中野泰志(経) / 秋山豊子(法) / 長沖暁子(経) / 福山欣司(経)



研究代表 中野泰志

9 | 研究・教育・学習環境としてのバリアフリー (総合研究)

表象文化論のデータベース化と映像と音楽の融合への実験的試み

本研究は、3つの柱で成り立っています。

(1)VHSテープのDVD化によって表象文化論の講義に役立てるために、205室に機材を導入し、これまでに60年代のアメリカのB級映画予告編集、W・カーウアイ、F・ラング、A・ヴァルダ、E・ロメール、F・オゾン、G・メリエスなどの作品のDVD化を行いました。

(2)通信教育部夏期スクーリングで、リュミエールやメリエスの短編映画にピアノの音を付け、デカルコマニーの映像にピアノとシンセサイザーの音楽を融合させるコラボレーションコンサートを開き、パフォーマンスアートとしてかなりの反響を呼びました。12月には、横浜市民大学講座のシンポジウムや通信教育部フランス語研究会の講師派遣で、コンサートを開き、アンケートを取ることができました。

(3)11月15日ドキュメンタリー映画「忘却に抗って」を、12月19日にアニェス・ヴァルダ「落穂拾い」を、来往舎シンポジウムスペースで上映し、表象文化の考察と普及をはかることができました。

【メンバー】小淵昭夫(経) / 井口拓磨(Student Researcher) / 石井康史(経) / 七字真明(経) / 杉原賢彦(映画評論家) / 藤崎 康(映画評論家)



研究代表 小淵昭夫

近代日本の衛生統計と疾病地理学 FCRONOSによる

このプロジェクトは、文部科学省の学術創成研究費の助成を受けて2002年の6月に始まった「曆象オーサリング・ツールによる危機管理研究」の柱の一つです。歴史と地理を合体させ、テキスト、数値、画像データを駆使して利用者自身がシナリオを書くことができる新しいコンセプトのオーサリング・システム(FCRONOS)を用いて、近代日本の疾病の歴史と地理を研究しています。日本人の身体と、それを取り巻く病原体やそのホストなどからなるエコシステムが、社会・経済・文化に媒介されながら、どのような時間的・地理的な経路をたどって近代化されたのか、私たちは何も知らないと言っても過言ではありません。一方で、それを知るための手がかりは、疾病統計、流行病記事、社会調査などのハードなデータから、病院のカルテ、薬の広告、病人の手記などのソフトな資料にいたるまで、ありあまるほど存在します。これらのデータから、人間と社会と自然が作り出すエコシステムが、個人の身体の上で絡み合うさまを明らかにすることを目標としています。

FCRONOSのHP : <http://www.fcronos.gsec.keio.ac.jp/home.html>

【メンバー】鈴木晃仁(経) / 永島剛(経) / 松原彰子(経)



研究代表 鈴木晃仁

国際共同研究プロジェクト 「メディア革命」

20世紀末の巨大な変化といえば、インターネットの登場とそれによる情報のボーダレス化、分権化による文化の変革でしょう。私たちの問題意識は、ニュー・メディアの登場によるこのような巨大な変化が、いったい過去の日本やドイツあるいは世界規模で存在したのかどうか、もし存在したとすれば、それはどのような経過をたどり、どのような結果をもたらし、どのような法則性が内在していたのか、といった諸点にあります。このような諸問題を、主に19世紀末から20世紀初頭の日本文化にフィールドを定め、メディア人類学的・メディア美学的視点から解明していこうというのが私たちの研究です。本研究は、ドイツのジューゲン大学メディア美学研究所との共同プロジェクトという形式をとり、すでに慶應義塾大学で共同シンポジウム、日本側研究者によるジューゲン大学での講演などの活動を行っています。

【メンバー】和泉雅人(文) / 足立典子(商) / 大宮勤一郎(文) / 識名章喜(商) / 平田栄一郎(文) / フュルンケース, ヨーゼフ(文) / 前田富士男(文)



研究代表 和泉雅人

英語共通カリキュラムにおける 教材・テスト・教育方法

今日、大学英語教育においては「知識や情報を吸収・発信し、対話・討論する」力の養成が課題となっています。経済学部の英語科目では、学生自身が関心を持った分野の話題について説得力のある論を展開し、自分の意見を明確に英語で表現する方法の指導に重点を置いています。本プロジェクトは、ニーズ分析にもとづく教材開発・教授法研究・評価方法研究を行い、経済学部の共通英語カリキュラムの完成度を高めることを目的としています。具体的には、ニーズ分析のための質問紙調査・教授法ワークショップの開催・教材およびテストの開発・学習支援メディアの研究・Webを用いた教材および教授法の研究開発などの活動に研究室を使用しています。

【メンバー】松岡和美(経) / 石井 明(経) / エインジ, マイケル(経) / 柏崎千佳子(経) / 河地和子(経) / 近藤正子(経) / 近藤光雄(経) / 佐々木由美(経) / 志村明彦(経) / 杉岡洋子(経) / 鈴木五郎(経) / 鈴木亮子(経) / 土屋博政(経) / 永井容子(経) / ノッター, デビッド(経) / 不破有理(経) / パティエ, ロジャー(経) / ポールハチエット, ヘレン(経) / 星 浩司(経)



研究代表 松岡和美

高次生命現象の理解のための 細胞行動データベースの作成

現代の生命科学は、多様な高次生命現象の本質解明や応用を目的に、理学、医学、農学、工学の学問領域の垣根を越え、人間社会や文化に多大な影響を与えています。この革新の原動力は、生命を構成する分子の解析技術の発達のみならず、分子を単位としたデータベースの構築によるところが大きいのです。しかし、高次生命現象の直接の単位は、分子そのものではなく、階層的には分子より一段階上に位置する細胞です。本プロジェク



研究代表 金子洋之

トは、「細胞が（主語） どういった状況下で（入力） 何を行う（出力）」といった細胞行動のフォーマットで、生物学的情報を集積した過去に例を見ない新たなデータベースを作成することです。これにより、高次生命現象の統合的理解へのブレークスルーを目指します。

【メンバー】金子洋之（文）／岩爪道昭（理化学研究所・言語知能研究チーム）／倉田敬子（文）／児玉隆治（基礎生物研究所）／鈴木 忠（医）／団 まりな（階層生物研究所）／長井孝紀（医）／中島陽子（文）／福沢利彦（商）／星 元紀（理工）／松本 緑（理工）

パーソナリティの多様性に応じた 教育のあり方についての研究

このプロジェクトのねらいは、まずは、パーソナリティの構造を明らかにすることにあります。最近、パーソナリティに対する遺伝と環境の関与のあり方を包括的に把握するために、一卵性双生児と二卵性双生児の方々のパーソナリティの類似の違いから、統計的にそれぞれの影響度を算出する行動遺伝学の研究を行っております。この研究の結果、どのようなパーソナリティが遺伝の影響が強く、またどのようなパーソナリティが環境の影響が強いのか推定することができます。さらには、どのような関わりを持つことによってより有効な教育ができるのか、精神疾患や犯罪などを予防できるのか、といった応用に関わる研究に進んでいきたいと考えております。



研究代表 木島伸彦

【メンバー】木島伸彦（商）／安藤寿康（文）／大野 裕（保健管理センター）／菅原ますみ（お茶ノ水女子大学文教学部）／西村由貴（保健管理センター）

解析的整数論の諸相

本研究では、解析的整数論の中でもとりわけ超越数論を中心に研究を進めています。整数を分母子を持つ分数で表される有理数の概念を自然に拡張し、整数係数の代数方程式の解として代数的数が定義されます。代数的数以外の数を超越数といいますが、超越数は有限的な網の目から漏れ出てゆく本質的に無限を内包した数であって、実例として円周率 や自然対数の底 e があります。現代超越数論では、ある種の自然な条件をみたす関数族から生成される定数群が超越数か否か、もしそうならどの程度代数的数から「隔たって」いるかを組織的に解明することが主要課題で、本研究も大枠その筋で進んでいます。参考文献『無理数と超越数』（塩川著、森北出版）。



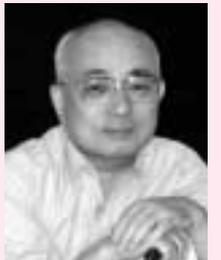
研究代表 桂田昌紀

【メンバー】桂田昌紀（経）／天羽雅昭（群馬大学工学部）／小山信也（理工）／塩川宇賢（理工）／田中孝明（理工）／西岡久美子（経）／畑 政義（京都大学総合人間学部）／光 道隆（経）／渡部睦夫（商）

地域文化振興および社会教育と芸術ホール 日本の公立芸術ホールと 米国大学ホールの比較考察

この研究は、地域社会における芸術文化の役割に目を向け、芸術ホール事業を評価し、それを米国の先進例と比較するものです。

この研究は、1)芸術ホール運営資料データベース作成、2)芸術文化社会教育プログラム・モデル事業、3)米国の大学ホール調査、4)芸術ホール評価の指針提言の4本の柱から成り立っています。とくに今年度は、横浜市民大学講座と連携して、種々の芸術のモデル事業を開催し、生涯学習プログラム開発に関するデータを収集しました。



研究代表 中矢一義

最終的には、芸術ホール運営に関する提言としてまとめ、「21世紀の芸術ホール」として出版する予定です。また、大学のリベラル・アーツ教育における、芸術や音楽のあり方、また大学の社会との対話のあり方にひとつのモデルを提示することをも目指しています。

【メンバー】中矢一義（法）／石井 明（経）／佐藤 望（商）

活動報告

「入学歓迎行事関連」

2002年度、入学歓迎行事として様々なイベントが開催されました。能楽公演や恒例の「春の声」コンサート、「塾長と日吉の森を歩こう」、コレギウム・ムジクム演奏会、映画上映、ギャラリー展示、さらには学生企画のダンス・演劇・映像音響表現もその一貫でした。2003年度は、主体を教養研究センターに移して企画を検討中ですが、過去の蓄積を生かしつつ、依頼型のイベントと公募型のプロジェクトを二本の柱として様々な行事を開催する方針です。大学で行われることは、すべて、専門・教養を含んだ広い意味での学問と結び付かなければなりません。我々は、この企画を通して、大学が自由な発想をもって学問に向かい合う場であることを新入生に感じてもらいたいと思っています。同時に、大学は主体的な活動を通して学問を身に付け伝えてゆく場でありたいと願っています。入学歓迎行事は単なる連続イベントではありません。教養研究センターは、この企画において、学問を実習（インターンシップ）する機会を広く提供することを目的としています。ご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

(小菅 隼人)

極東証券寄附公開講座

「『教養』とは何か—よりよく生きるために」をテーマとした2002年度極東証券寄附公開講座（全10回）は、昨年10月4日の川勝平太国際日本文化研究センター教授による「新しい国づくりに求められる教養とは何か」を皮切りに、塾内外の多彩な講師陣による熱のこもった講話を得て、12月13日の総括シンポジウムをもって終了しました。日によっては立ち見もできるほどの盛況で、聴講者との質疑応答で時間を遙かに超過することもしばしばありました。ただ惜しむらくは、塾生の参加が期待通りには行われなかったことです。これは、単位として認められないことと大いに関係しているでしょうが、6時限目という時間設定にも問題がありそうです。検討課題の一つとしたいと思います。

なお、この公開講座は極東証券からの寄附をもとに、教養研究センター内に設置された運営委員会が企画・運営を担当しています。来年度の企画に関しては未定です。斬新なアイデアをお持ちの方には是非ともご協力を賜りたいと思います。

(木保 章)

慶應義塾大学港北区民講座

昨年11月2・9・16日の3日間、教養研究センターと横浜市港北区の共催で慶應義塾大学港北区民講座が毎回50名を超える参加者で実施されました。この時期には横浜市民講座、極東証券寄附公開講座のふたつが既に実施されているということもあり、趣を異にする「実践講座」の形式をとることにしました。講座は超表象デジタル研究センターのプロジェクトの一つである「文化としてのウォーキング」が、これまでの研究成果の一部をこの講座の中で展開する形で行われました。午前中は20名程のグループに分かれて体育研究所の教員による指導により正しい姿勢や歩き方を学んだ後、まだ自然環境が残る日吉近郊（日吉キャンパスを含む）を2時間ほど散策。午後は、プロジェクトメンバーの市村操一（東京聖徳大学教授、センター研究員）、横山千晶（法学部教授、センター所員）、勝川史憲（スポーツ医学研究センター専任講師、センター所員）の3名の講師によるウォーキングを様々な視点からとらえた講義が行われました。最終日の午前中には先のシドニーオリンピック競歩日本代表選手の小池昭彦氏（塾員平成8年卒）も指導に加わり、ウォーキングを多角的に体験できる講座として好評のうちに終了しました。

(近藤 明彦)

事務局だより



昨年6月に三田キャンパスにあるハラスメント防止委員会事務室から異動してまいりました。7月からは日吉研究支援センター

と教養研究センターの兼務ということで、来往舎1階事務室奥にあります。研究支援センターでは科研費関連の業務、教養研究センターではセンター運営事務全般を担当し、コーディネート・オフィスの先生方のサポート係をさせていただいております。センター業務は立ち上げ時期なので、次から次へと新しい問題が生じて、刺激的で充実した毎日を過ごしております。今年度は、日吉の先生方を全員覚えることを目標にしており、あと少しで完全制覇です。

宮坂敦子

シンポジウム[テーマ『外国語教育を核とした教養教育の将来』]を開催（参加自由）

日時：2003年2月5日13時30分～16時

会場：日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース
司会：小淵昭夫（経） パネリスト：エインジマイケルW（経）、鈴木透（法）、岩波敦子（理工）、重松淳（総合政策）

* 連絡先：コーディネート・オフィス

(内線33006 宮坂)

Newsletter

2003.Jan. No.1

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2003年1月31日

代表者 羽田 功

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111（代表）

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

「教養教育に関するアンケート」を実施

センターでは日吉専任教員を対象にアンケートを実施いたしました。提出締め切りは1月31日でしたが、2月初旬まで受け付けてさせていただきますので、ご協力くださいますようお願い申し上げます。用紙が必要な方はホームページからダウンロードできます。

教養研究センター所員募集

センターでは2003年4月から2年間、教養教育についての調査・研究に関心ある所員を募集しています。詳細はコーディネート・オフィス（内線33000 事務長宮木）まで。

教養研究センター一般研究募集

2003年度のセンター一般研究（共同研究）の公募を企画しています。詳細はセンターのホームページと来往舎1階の教養研究センター掲示板に掲載いたします。

情報提供のお願い

現在、センターでは他大学における教養教育・研究活動に関する情報収集を進めております。教養教育・研究に携わっている国内外の大学、研究所をご存知の方は、コーディネート・オフィスまで情報をお寄せください。

(Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp)